マルレーン・ヴインハーデン、ピヨトール・ザモイスキー、アーティスト・トーク

2000年７月１９日東京芸術大学７０４スタジオ（参加者約３０人 ）

１６：１０　アーティストトーク開始。学生からのスチューデント、イニシアティヴの説明後、伊藤氏によってパドレスの説明があり、その後、マルレーンのスライドトークが始まる。学生と伊藤氏が説明している間、マルレーンとピヨトールに通訳をしていなくて、二人とも困った顔をしていた。この集まりの意と、進行の流れを掴むためにも、何でも通訳しなくてはならないと思う。

１８：００　途中休憩。最初マルレーンのスライドトークから始まったのだが、スライドの調子が悪く急きょピヨトールのスライドトークから始まった。彼は過去の作品一点一点を丁寧に解説し、約一時間三十分話をした。

１８：１０　マルレーンのスライドトーク開始。彼女はまずデュエンデのアーチスト、イニシアティヴの、説明から始まって、そのビルディングに入っている各作家のスタジオを紹介してくれた。その後ピヨトールと同じように過去の作品を解説し、約４５分程度で終了する。その後引き続き挙手にてアーティストへの質問コーナーを設けた。なかなか学生からの質問が出ないのが気がかりだった。その後茂井氏よりＳＯＷの説明があって、２０：００頃無事アーティストトークを終了した。

２０：１５　町人にてピヨトールのウェルカムパーティー兼、アーティストトークの打ち上を行った。和気あいあいと和んだ雰囲気であった。学生もアーティストトークの場では質問できなかったが、ここでは様々な疑問を聞くことができたみたいである。彼女は焼酎とビールを交互に飲み、アルコールの強さを発揮していた。また納豆初挑戦で、最初は嫌がっていたのだが、「僕は毎朝納豆を食べている。」と説明したら三度目の挑戦にて食すことができた。又、学生達とナイトスポットへ繰り出す約束をしたようでご満悦であった。

０：３０　徒歩にて上野駅へ、学生達は飲み足りないらしいが、ピヨトールとマルレーンがまた体調を壊すと困るのでここで解散することにする。

アーティストトークの内容を参考程度に書いておきます。

アーティスト、イニシアティブについて。ロッテルダムには、１６のアーティストイニシアティブがあり、デュエンデはその中の一つである。デュエンデのビルディングの中には４０人程度の作家がスタジオとし
て使用している。一人のアーティストが使える広さは、約１３Ｍ×８Ｍである。

マルレーンの作品について。最初はペインターとして出発する。自分のコレクトしたオブジェクトをモチーフにタブローを制作していたのだが、ペイントは、自分のやり方ではないことに気付き、日用品をコレクトし、それを使用して、インスタレーションをするという仕事に展開した。彼女のコレクションしたマテリアルは、一般的には使用することが目的であるため、機能的な形をしていたり、よく見ないと美しいとはいえない物であり、その日用品の隠れた魅力を引き出そうとしている。また彼女の創る形態は、よくサークルが現れる。サークルを発見したヒントには曼陀羅があったらしい。また顕微鏡で見た時の
自然物の構造からもインスピレーションを受けているようだ。他にもターゲットや、花など、象徴的な意味を探しているらしい。

質問コーナー
出口氏～ピヨトール
Ｑ　あなたの作品は、瞬間的な作品が多いのですが、それを写真に残すというのは、どのような意味があるのですか？
Ａ　ドキュメント性も大切であるが、イメージを撮ると言うことも考えている。自分の作品は、２～３週間で消滅するし、又作品の性質上トランスポートもできない。写真は唯一作品を残せる手段である。又私の作品は、ギャラリーのみでなく、その周りの空間や、国、環境なども重要なのである。
Ｑ　魚市場や、自然など美術以外の人々が見る場所に提示することを大切としているのに、写真といったドキュメントとして作品を残すことに矛盾を感じてないのか？
Ａ　基本的に瞬間性に興味があるわけではないが、関係性に置いてそのような性格を持つこともある。６０

年代のハプニングも写真として記録が残っている。
Q　写真自体は表現なのか、ドキュメンタリーなのか？
A　基本的にはドキュメンタリーであるが、表現として確立されないかといった、少々の野望はある。

近藤氏～マルレーン
Q　あなたの作品は、非常に女性的であるが女性的であるということを自覚しているのか？又そのことをポジティブに捉えているのか、ネガティブに捉えているのか？
A　女性的と捉えられるのは仕方がないが、その側面だけで見られてほしくない。私の作品は、女性のジェンダーとしてというより、男性的な形や、女性的な形の両側からモチーフ探しをしている。

学生～マルレーン
Q　スライドトークの中で、美しくない物を集めていると言ったが、それは何ですか
？
A　美しくないと言う言葉は、アーティストが言っているような美しさではなく、日常的に言われている美のことを指したのである。

山口～二人に
Q　今回日本で発表をしたわけですが、日本に来る以前に想像していた日本、実際に来日し、二週間制作をして感じた日本の差異はありますか？またそのことで作品に影響を与えたことがあったら教えてください。
A　（ピヨトール）日本に来る前、片寄った映像の日本のビデオを見たのだが、幸い日本にたくさんの友達がいて、だいたいの想像はできていたし、それほど差異は感じられなかった。逆に日本人は、強い伝統性と日常をどうやって折り合いを付けている
のかを聞きたい。
A　（マルレーン）あまりにも東京は広くて、またひどい。ヨーロッパの町と違って、何処まで行っても町が終わらなくてびっくりした。又、ネオンや、過剰な宣伝広告があるのに、その中にいる人たちは、いたってノーマルである。ナイトスポットには行ってないが、若い世代と、その少し上の世代とのギャップが激しいように感じる。

リポート山口　隆志